

ほんげみょうしゅう
本化妙宗
(法華經・本門)

『幸せの条件』



いつてんしかいかいきみょうほう
一天四海皆帰妙法



心の宝第一也



幸せの条件とは、「経済の安定（お金）」と、「健康で長生き」と思
います。現に新聞・雑誌にも「金運を呼ぶ財布」「お金に好かれる法
則」はたまた、「長寿の為の食品」等々。では、日蓮聖人はどの様に
説かれているのでしょうか。

＊ 蔵の財（即ち、経済の事です。）



持妙法華問答鈔に云く。

「生涯幾何ならず、思へば一夜の飯の宿を忘れて幾何の名利をか
得ん。又、得たりとも是れ夢の中の栄へ珍しからぬ楽しみ也。
前世の業因に任せて営むべし」

現代釈

人生とはそう長くない、ただ一夜の飯の宿である事を忘れて、どれ
ほどの財産を得たからと言っても、それは夢の中の栄へであるに過

ぎない。夢物語ゆめものがたりである。入るものは入って来る、入らないものは入らない、自分の前世ぜんせいで決まっている、前世でどれだけの徳とくを積んだかで決まる、宝くじで大金を手にする人は前世で徳を積んだ人である。しかし、今財いまざいが入って無くても、いつかは又、前世の業因ぜんせいごういんがあるので入る時には入って来るが、慾よくを以て自分の器うつわ以上の物を求めれば全て無くす事になります、自身が前世の業因を信じられるかどうかなのです。」

＊身の宝み たら（即ち、健康や身体に備わる才能・

社会的地位や名誉又は家族に付いて）



四條金吾殿御返事に云く。しじょうきんごどのごへんじ

「いかにいとをし、離れじと思う妻なれども、
死しぬれば甲斐無し。」ししぬればかいなし

現代釈

いかに愛おしい、離れまいと思う妻なれども、
死んでしまえばどうにもならない

持妙法華問答鈔に云く。じみょうほつけもんどうしやう

「只須く汝仏にならんと思はば慢のはたほこをたをし 忿りの
杖をすてて偏に一乗に帰すべし、 名聞名利は今生のかざり」
ただすべから なんじほとけ ひとへ いちじやう き 名もん れき こんじやう

現代釈

世間に聞こえる名誉や評判又は利慾や利得は今生の飾りである。

(蔵の財も身の宝も今生限りのもので、寿命が尽きればそこに置いていかなければなりません。)

* 最後に心の宝です。(御本尊を信じ、日蓮聖人を通して本門の題目、これを唱え弘宣流布していく姿。)



阿佛房御書に云く。

「法華經の題目宝塔なり、宝塔又南無妙法蓮華經也 今阿仏上人の一身は地水火風空の五大なり、此五大は題目の五字也 然れば阿仏房さながら宝塔、宝塔さながら阿仏房 聞・信・戒・定・進・捨・慚の七宝を以てかざりたる宝塔也 我身又三身即一の本覺の如來なり かく信じ給て南無妙法蓮華經と唱え給え」

現代釈



南無妙法蓮華經と唱える私たちには七宝と言って七つの宝物によって飾られているのです。七宝とは、とてもとても、高価な宝石を云います。しかし、日蓮聖人の云はれている七宝とは、物質的な財宝(蔵の財・身の宝)ではなく、「聞・信・戒・定・進・捨・慚」の事、これこそが「心の宝」なのです。

- 一、聞^{もん}とは、正^{しょう}法^{ほう}を聞^きく。
- 二、信^{しん}とは、わだかまりのない澄^すんだ心で信^{しん}じる。
- 三、戒^{かい}とは、滅^{めつ}悪^{あく}勸^{かん}善^{ぜん}（悪^{あく}を滅^{めつ}して善^{ぜん}を勸^{かん}める）
- 四、定^{じょう}とは、禪^{ぜん}定^{じょう}、心^{しん}を不^ふ動^{どう}にして定^{じょう}める。
- 五、進^{しん}とは、精^{しん}進^{じん}、懈^け怠^{たい}の心^{しん}や退^{たい}転^{てん}なく真^まっ直^{ちく}ぐ道^{みち}を進^{しん}む。
- 六、捨^{しゃ}とは、執^{しゅう}着^{ちやく}の心^{しん}を捨^すてる。
- 七、慚^{さん}とは、慚^{さん}愧^き、自^じらの過^かちを反^{はん}省^{しやう}して、心^{しん}に深^{ふか}く恥^{はづ}れること。

「お母^おさんである久^く遠^{おん}本^{ほん}佛^{ぶつ}が 赤^{あか}ちゃんにお乳^{ちち}のお題^{だい}目^{もく}を
与^{あた}えます。赤^{あか}ちゃんは、このお乳^{ちち}の栄^{えい}養^{よう}分^{ぶん}や成^{せい}分^{ぶん}がどうかと
一^い切^{っさい}疑^{うたが}うこと無^なく、唯^{ただ}無^む心^{しん}にこのお乳^{ちち}を飲^のむ事^{こと}です。」



南無妙法蓮華經

合掌